

初期近代文学空間としての書簡

水野 眞理

シンポジアム総括

本シンポジアムは初期近代の英國文学空間における書簡ないしは書簡体出版物をとりあげた。従来の文学研究では作家の書簡はその真情を吐露したもの、伝記的「事実」の鉱脈、と見なされることが多かった。しかし EEBO や ECCO 上で、タイトルに epistle, letter を含む書物の点数が膨大であることから分かるのは、この時代に多くの書簡が「出版」されたことである。また印刷術発明の前にも、書簡は写本によって「出版」されていた。書簡は出版された時点で、個人の手を離れてむしろ公共にむけた言語行為となる。それらは差出人、受取人ともに実在の人物であるという点ではノンフィクション的であるが、一方、個人の真情を綴ったものというより公を意識したものという点ではフィクション的・演技的であるといえる。

最初に水野が司会者の立場から、出版された書簡の諸機能——個人間のやりとりから、布告、団体への激励、報告、また書簡体の諷刺詩、献辞、序文など——を整理しておおまかな見取り図を示し、ケーススタディとして Edmund Spenser を紹介した。続いて井出が書簡の書き手としての Gabriel Harvey を中心に、書簡体フェイク・ニュースとフィクションの関わりについて報告した。次に福本が Alexander Pope が自らの書簡を捏造してまで出版する、という書簡出版への奇妙な執着の背景を考察した。最後に富樫が 17 世紀英國における書簡詩の主題における変遷をあとづけた。

本シンポジアムは、従来の英文学研究が看過しがちであった作家の書簡・書簡体文書を、歴史・文化の文脈に置いて読むことを実践し、フィクションとノンフィクションの交差する場としての書簡研究の可能性を開くことに成果をあげたと考えている。

ケーススタディ：手紙を書く Edmund Spenser

Spenser は英文学の世界では詩人として扱われるが、職業人としては植民地総督の私設秘書として書簡を代筆する仕事から始めて、アイルランドでの官職においても公文書を書くことを本業とした。報告では彼の書いた書簡の多様な機能を、印刷文化に留意して初版のファクシミリを用いて考察した。

Spenser の最初の著作と言える『羊飼いの暦』(*The Shepheardes Calender* 1579)の扉には献呈先である Philip Sidney の名が、「高貴にして高徳の紳士、学芸と騎士道の全ての称号にもっとも値する方」、という贊辞とともにごく控えめに挙げられている。扉の裏では、著者はオウィディウス以来の伝統に従い、自らの小さな作品に宛ててメッセージを送り、謙遜の身振りを見せている。しかしその中で「高貴さと騎士道の筆頭」と、本の行き先の人物を持ち上げていることから、この書簡詩は事実上、タイトルページに挙げられた Sidney への献辞の機能を持つことができる。さらにこれに続いてイニシャル E.K.なる人物から「雄弁家にして詩人」の Gabriel Harvey に宛てた書簡体献辞(的推薦文)が掲げられる。それは牧歌というジャンルと、意図的に粗野な文体との適合性についての長大な弁護であり、序文の機能をも帶びている。追伸の部分で E.K.は Harvey の韻文作品をも賞賛し、本書は Harvey の売り込みにさえ利用されている。そればかりか、この E.K.は当時の英詩出版では極めて異例なことに、全体の梗概 2 ページに加え、『羊飼いの暦』の 12 の月の eclogue に要旨と詳注、寓意の解説をつけて、この詩集がまるで注釈に値する古典であるかのように振舞う。一般に E.K.の正体とされる Edward Kirk は Spenser の大学時代の友人であるが、その後文学の世界から完全に姿を消すことから、E.K.の名を冠した部分は実は Spenser と Harvey の共同作業ではないか、という Hadfield の推測は頗けるものがある。

『羊飼いの暦』は、女王 Elizabeth I 世のフランス皇太子との結婚に反対する政治的メッセージを含むがゆえに、Spenser は自らを Immerito (相応しくない者) と呼んで匿名で出版した。一方献呈先の Harvey は Spenser のケンブリッジ時代以来の友人であった。この詩集の翌年 1580 年には、Harvey と Immerito すなわち Spenser の間で交わされたとする書簡集『最近二人の大学人の間で交わされた上品で機知に富む親密な三篇の書簡』(*Three Proper, wittie, and familiar Letters: lately passed between two University men* 1580) によって二人の親しい関係が宣伝される。その内容には当時の話題であった音量詩の実験に関する考察と作例、また『妖精の女王』*The Faerie Queene* の一部を手稿で読んだ Harvey の批判も含まれている。冒頭の書簡体献辞は「著者の味方 (Wellwiller)」と称する匿名の人物から「礼を弁えた購買者へ」となっていて、この出版が「礼を弁えない敵」に対する挑戦であることが示される。そのような敵の一人 Thomas Nashe が揶揄するよ

うに、この「味方」とは Harvey 自身と思われ、このように Harvey-Spenser コンビが自己宣伝的な出版を行ったことを考へると、一年前の『羊飼いの暦』もまた二人の自己宣伝的な合作であると考えるのも無理のないところであろう。残念ながら、Spenser が個人に宛てた書簡はこの胡散臭い書簡集以外に残っていない。

Spenser 自身が自らの名前を明らかにして書いている書簡体献辞は、『妖精の女王』の前半 3 卷(1580)を Elizabeth 1 世に捧げたもの以降になる。『妖精の女王』1-3 卷は冒頭での女王への献辞、巻末での男女 16 人の貴族への献呈ソネットに加え、末尾には、最も重要なパトロンであり出版に助力した Walter Raleigh に宛てた長文の書簡が付され、著者の意図が解説される。その冒頭近くに “it giueth great light to the Reader” とあり、書簡の宛先は Raleigh であっても、事実上、これが読者一般にあてた解説的序文であることがわかる。

虚構作品である『妖精の女王』の作品中で登場する唯一の書簡が虚偽と中傷の書簡であることは興味深い。第 1 卷の結末は「神聖」を体現する騎士 Redcrosse Knight が、「真理」を体現する乙女 Una と結ばれる、という運びになるが、Una の父親であるエデンの王が、娘の婚約を予告しようとする瞬間、結婚に対する異議申し立ての手紙が届く。差出人は Fidessa、その正体は、物語の早い段階で Redcrosse を籠絡した挙句に巨人のダンジョンに幽閉されるように仕向けた魔女 Duessa である。手紙の書き手は、Redcrosse が既に自分と婚約しているという虚偽を述べる。最後の Fidessa という署名は、全編の中でここだけ、フォーマルな書簡の書式に沿うために韻律外の一語としておかれ、ことさら読者の目をひく。Spenser の同時代の読者は Fidessa こと Duessa の手紙を、Scotland 女王 Mary Stuart によるカトリック・イングランド女王としての正当な権利の宣言だと理解した。Mary の処刑は本書の出版のわずか 3 年前に執行され、歴史的アレゴリーによって Duessa が Mary を表すことは、1596 年版の第 5 卷、「正義」の物語において、Mercila の宮廷で Duessa が裁きにかけられ処刑される、というくだりで明確にされることになる。Mary の波乱の生涯は何かと書簡が問題となっていたため、それを Spenser が作品中に利用し、読者はそれを「正しく」読み取ったのである。

最後に Spenser の詩人としてではない書簡について見ておく。『三篇の書簡』と『妖精の女王』初版の間の 10 年の空白に、Spenser はアイルランド総督 Lord Grey(1536-93)の秘書として随行し、Grey の解任後もアイルランド南部 Munster 議会の書記を務めた。秘書の業務は、要人の書簡や報告を口述筆記・代筆すること、要人のもとに届いた書簡のコピーを作成することである。この秘書業の記憶が、Spenser ののちの虚構作品に表面化してくるのである。

1580 年アイルランド南西部の勢力である Desmond 一族がイングランドの支配に反旗を翻し、彼らがカトリックであったことから、イタリアとスペインから応援軍が来て西部ディングル半島の砦に立てこもった。同年 11 月、総督 Grey はこの砦を攻撃し、降伏した反乱軍の大半を処刑した。Grey の行動は捕虜の生命を保証した国際法に違反する「虐殺」として批判を浴びた。この事件を、直後に Spenser が代筆した Grey から女王への報告書簡と、Grey の死後 Spenser が書いた *A View of the State of Ireland* (『アイルランド状況管見』1633) とで比較してみる。Spenser は『管見』の中で “as I remember” として、これを「記憶」に基づいて書いていることを認めている。確かに細部に異同はあるものの、16 年の時を置いても Spenser の Grey を擁護する姿勢は連続している。その「記憶」とは、単なるこの虐殺の目撃体験ではなく、Grey の秘書としてそれを書簡に筆記した体験に基づくものである。書簡 letter を書くことは、手を動かし文字 letters としてメッセージを紙に定着させるとともに、自らの脳髄にそれを刻み込む行為であったといえる。しかしその情報は時を経て最初の形とは微妙に異なる形で虚構化され、印刷によってページに刻まれ、そして公共の記憶に刻まれていくのである。Spenser の秘書としての書簡筆記が彼の虚構作品にどう対応し、またそこにずれがあるとすればそれが意識的なものか無意識的なものか、など今後研究すべきことは多い。

Works Cited

- Spenser, Edmund.. *The Faerie Queene. ...Fashioning XII. Morall vertues.* [Books I-III] London: Ponsonbie, 1590.
---. *The Faerie Queene....Fashioning XII. Morall vertues.* [Books I-VI] London: Ponsonbie, 1596.
---. *Selected Letters and Other Papers.* Ed. Christopher Burlinson, Andrew Zurcher. Oxford UP, 2009.
---. *The Shepheardes Calender. Coteyning twelve AEglogues proportionable to the twelve monethes.* London: Singleton, 1579.
---. *Three proper, and wittie, familiar Letters: lately passed between two Uniuersitie men.* London: H. Bynneman, 1580.
---. *A View of the State of Ireland Written dialogue-wise between Eudoxus and Irenaeus.* Ed. James Ware. Dublin, 1633. Rpt. Da Capo, 1971.